2016 年 1 月 1 日 No.19(1)

HB通信

編集・発行 /
一般社団法人
ひょうご部落解放・人権研究所

〒650-0003　神戸市中央区山本通 4-22-25 兵庫人権会館 2 階
TEL：078-252-8280　FAX：078-252-8281
e-mail：blrhyg@extra.ocn.ne.jp　URL：http://blrhyg.org/

あけまして おめでとう ございます

昨年は、沖縄の民意を無視した辺野古の新基地建設工事や川内原発の再稼働、安保関連法の強行採決、大阪府知事と大阪市長のダブル選挙での大阪維新の圧勝が続き、年末には、最高裁が夫婦同姓を強制する民法の規定に合憲の判断をし、大阪地裁は公立校の教職員に「君が代」の起立斉唱を義務づけた「大阪府国旗国歌条例」を合憲とするなど、ろくでもない 1 年でした。しかし、安保関連法に対して草の根の反対運動が展開され、SEALDs をはじめとする若者の新しい動きがみられたことは、闇のなかの一条の光でした。

今年は申年です。「見ざる聞かざる言わざる」の三猿の絵を年賀状で目にしました。三猿の意味には、いろいろな解釈があるようですが、研究所は社会の動向を注視し、さまざまな意見や主張に耳を傾け、積極的に情報発信をしていきます。今年もよろしくお願いいたします。

所長　石元清英

所長の諏訪山だより

「太ったね」は、褒め言葉

映画監督・今井正の代表作のひとつに『青い山脈』（1949 年）がある（前号につづいて、今井正の映画で、恐縮です）。

この映画は、敗戦後、民主化の風が吹き始めた地方都市での、民主化を進めよとする人たちと、因習にとらわれた保守派との軋轢を描いた秀作である。この映画の冒頭、高等女学校の生徒（杉葉子）が高等学校（旧制弘前高校と思われる）の生徒（池部良）と出会うシーンがある。そこで女生徒は自己紹介として自分の身長と体重を言うのであるが、それが「160cm、56Kg」であった（尺貫法ではなく、メートル法で言うところが敗戦後の民主化の空気を感じさせる）。この身長と体重から BMI 指数を算出すると、21.9 となる。BMI は、体重（Kg）を身長（m）の二乗で除したもので、肥満度を表す体格指数である（Body Mass Index）。標準とされるのが 22 で、25 を超えると肥満、18.5 を下回ると痩せ過ぎとされる。したがって、『青い山脈』の女生徒は、ほぼピッタリの標準体格なのである。

だが、身長 160cm で、56.3Kg、身長が 155cm なら 49.5Kg、165cm なら 59.9Kg という体格（BMI22）を太っていると感じる人は多いのではないだろうか。しかし、健康上からみれば、これが標準であり、この標準体格を太り過ぎと感じる人は、体重や体型についての認識が歪んでいるといえる。

各誌の雑誌モデルの BMI をみると、『Seventeen』の桐谷美玲は 164cm、39Kg で 14.6、『MORE』の鈴木えみは 168cm、43Kg で 15.2 である。また、2012 年のミスインターナショナル日本代表となった女性は、170cm、49Kg で BMI は 17.0 であった。このような痩せ過ぎた女性たちが若い女性にとっての手本であり、理想の体型となってしまっている。このことが過度のダイエットにつながり、拒食症や過食症などの摂食障害を引き起こしているのである。

女子高校の生徒を対象とした調査結果によると、現在の BMI が 18（身長 155cm なら 43.2Kg）で

ある 17 人のうち、理想の BMI を現状の 18 と答えたものが 2 人、同じく 17 が 8 人、16 が 6 人、15 が 1 人であった。BMI 16 は、身長 155cm なら 38.4Kg、BMI 15 は 155cm、36Kg である。厚生労働省の摂食障害の判定基準である標準体重の 20％減を十分満たしている 17 人のうち、15 人がもっと痩せたいと考えているのである。現代社会において若い女性の身体がその人にとってのパワーの源ではなく、他者からの評価や攻撃、さらには欲望の対象となっており、見られる性としての女性の身体が、自分のものであるにもかかわらず、自分のものではないという疎外された状態となってしまっているのだ。

『青い山脈』と同じく、1949 年に公開された小津安二郎の映画『晩春』では、主人公の紀子（原節子）と久しぶりに出会った知人（三島雅夫）が紀子を見て、「紀ちゃん、太ったね」と言うシーンがある。かつては、痩せていることが貧相で、不健康とみなされていたのであり、「太ったね」は褒め言葉だったのである。

所長　石元清英

まんがのすゝめ

『海街 diary』flowers コミックス 1 巻～6 巻（以下続刊）

吉田秋生／小学館／ 2007 年～／ 545 円（税別）

何度も手に取り、読み返す本がある。眠れない夜、心が少し疲れた日。筆者にとって『海街』は、そんな大切な作品のひとつである。

吉田秋生の作品といえば、NY のストリートキッズとマフィアの抗争を描いた『BANANA FISH』（1986 ～全 19 巻）に代表されるように、80 年代少女漫画の世界では、ある種、異質な存在でもあった。だがこの『海街 diary』は、鎌倉の古い家で暮らす 3 姉妹と、父の死によりともに暮らすことになった異母妹との日常を描いた作品で、これまでの吉田作品とは趣が異なる。いずれにせよ、すでに少女漫画界では大御所の域に入ったこの作者の作品は、どれを読んでもとにかくうまい、おもしろいのである。

さて、物語はある日姉妹に、15 年前に家族を捨てて、女性と出奔した父の訃報が届くところから始まる。一緒に逃げた女性はすでに亡く、父は生前再婚して新しい家族と暮らしていたという。喪主であるべき再婚相手は泣きじゃくるばかりで弔問客の応対もできない。葬儀をとりしきっていたのは父の連れ子で、三姉妹の異母妹、まだ中学生のすずであった。初めて知った妹の存在、葬儀の様子からうかがい知ることができる彼女の境遇に、長女の幸は帰りの電車が発車する間際、見送りに来ていたすずに「鎌倉に来ない？」と呼びかける――。

看護師の長女、町の信用金庫に勤める次女、スポーツ用品店で働く三女、そして地元ジュニアサッカーチームで活躍する四女のすず。死にゆく父の看病を一人で背負い、心だけ大人になることを強いられたすずは、姉たちとの生活で、徐々に自分を解放していく。人の生死、病による挫折と再生、愛する人との別れと、新たな出会い。四姉妹それぞれの日常が、地域や周りの人たちとの関わりを通して、ときに交差し、ときにすれちがいながら、丁寧に紡がれていく。

作品にどっぷりハマってしまった筆者は、昨年の盆休み、一念発起し鎌倉を訪れた。鎌倉の海、空、社寺仏閣、街角にある古い和菓子店と、江ノ島電鉄（通称：江ノ電）。時期が時期だけに観光客でごったがえしてはいたが、踏切の向こうから、神社に向かう坂道から、四姉妹の誰かとふとすれ違うのではないか、という錯覚に陥った。

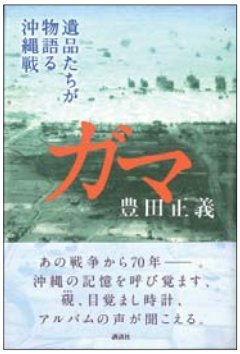
この作品は昨夏、是枝裕和監督によって映画化された。四姉妹の配役は、綾瀬はるか、長澤まさみ、夏帆、広瀬すずと超美形ぞろい。原作のイメージを壊すことなく、素敵な作品に仕上がっていた。ちなみに映画の撮影中、この錚々たる四姉妹が極楽寺駅で撮影していたにもかかわらず、観光客が一斉にカメラを向けたのは、眼下を通り過ぎる江ノ電だった、という逸話が残る。江ノ電人気、おそるべし。

（K）

本の紹介

『ガマ―遺品たちが物語る沖縄戦』

豊田正義著、講談社、2014 年刊、1300 円(税別)



敗戦後 70 年、安保法（戦争法）に揺れる昨夏に手に取った 1 冊が、本屋さんの児童書棚の戦争コーナーに並んでいた本書である。

沖縄本島南部に無数にあるガマ（自然洞窟）。沖縄戦では、住民や日本兵の避難場所となり、野戦病院にも使われた。そのガマで何十年にもわたって、コツコツと遺骨や遺品を掘り続け、中から今も聞こえてくる「声なき声」に耳を傾けてきた人々がいる。アメリカ兵が強奪に近い形で持ち帰った沖縄の人々の持ち物や文化財を、元の所有者に返還する活動をしている人もいる。

著者の豊田さんは、そうした人々や遺族をはじめ多くの沖縄の人たちに話を聞きながら、3 つの遺品をめぐる現在と過去の物語を紡ぎ出した。

戦後 60 年経って遺骨収集作業が行われたガマから見つかった、12 歳の哲也が母から卒業記念に贈られた大切な「硯（すずり）」。

「音楽の先生になる」という夢を断ち、鉄血勤皇隊（学徒隊）に召集された 16 歳の新太の最期の時を一緒に刻んだ「目覚まし時計」。

「戦利品」として本国に持ち帰った元アメリカ兵から、64 年の歳月を経て、持ち主の遺族に返された「夏子のアルバム」。

それぞれ実在のモデルがいるが、この本は「フィクション」の形で書かれている。ノンフィクション作家の著者が今回このやり方で書いたのは、「はるか昔に起きた遠い出来事として」ではなく、「いまを生きている私たちも、あの戦争とつながっていることを、どうにか描いて」みたかったからだ。

これら 3 つの遺品は、長い時を経て奇跡的に遺族の元に戻った。そこには、それをつなぐ多くの人の存在がある。印象的だったのは、第 2 話に出てくる、実在する遺骨収集ボランティア団体代表の具志堅さんの話だ。「精密発掘」という方法を編み出し、はけや竹串を使って気の遠くなるような作業をしながら、どのように亡くなったのか、土に埋もれて、どんな姿勢で過ごしてきたのかを浮かび上がらせ、記録しようとする。「遺骨収集とは、土に埋もれ、骨となってはいても、ある一人の人間を、いまの世の中に還す儀式」だと具志堅さんは考えている。そしてそれは「家族や血筋の人が…亡くなった家族を捜し当て、弔うという『希望』につながっている」。

具志堅さんはじめ、著者が話を聞いた人たちは口をそろえて「沖縄戦は、まだ終わっていない」と言う。それは、この本を通して著者もまた伝えようとしていることでもあるだろう。

それらの思いを受け取って、「埋もれかけた声なき声」に耳を傾けながら、「戦後 71 年」の今年を過ごしたいと思う。　　(H)

● 2015 年度人権歴史マップ連続セミナー第 5 回

「女人禁制」

■講師：源　淳子さん（関西大学人権問題研究室委託研究員）

■日時：2016 年 1 月 23 日（土）14：00 ～ 15：30

■場所：のじぎく会館 203 号室

■参加資料代：一般 800 円

会員・学生・定期購読者 500 円

石上神社の結界

● 2015 年度人権歴史マップ連続セミナー第 6 回

「毛スキ体験と御着フィールドワーク」

■講師：柏葉　嘉徳さん（皮革研究家）
■日時：2016 年 3 月 19 日（土）
　　13：00　JR 御着駅集合
■参加資料代：2,000 円　　**※事前申込が必要です。**
■申込期限：2016 年 3 月 4 日（金）

フィールドワーク　新コース実施！

昨年 11 月 8 日、淡路市からのご依頼で、宇治川流域を中心に近隣の人権関係施設をフィールドワークしました。京都産業大学他非常勤講師で当研究所研究員でもある本郷浩二さんの考案・案内による新コースです（行程表参照）。

②の宇治川地区は、元は風呂谷と呼ばれる皮田村で、江戸時代には皮革の仲買商が多く住み、花売りも盛んでした。④の湊川神社には境内に楠正成の墓があり、宇治川の人たちが毎日花を絶やさなかったという伝承があります。明治時代になると困窮化が進みます。政治家の大江卓は、神戸滞在中に宇治川の人々の悲惨な生活を見て「解放令」の必要性を感じたと後年述べています。日露戦争後には警察主導の部落改善運動により様々な取り組みが行われました。しかし、いくら改善に努めても差別はなくなりませんでした。そんななかで、部落外との関係を問い直し、差別に異議申し立ていく運動がおこっていきます。

この宇治川を中心としたコースでのフィールワークをご希望の方は、研究所へご相談ください。

■行程表

①海外移住と文化の交流センター
（本郷さんの講義、ブラジル移民の解説）
↓バス移動
②宇治川地区（徳照寺他）
③宇治川商店街～元町商店街
（米騒動で焼打ちされた鈴木商店と神戸新聞社の跡他）
④湊川神社
↓バス移動
⑤南京町
⑥神戸港　平和の碑（神戸華僑歴史博物館前）
⑦神戸港震災メモリアルパーク
⑧神戸港移民船乗船記念碑

事務局から

● こたつ生活してますか？あったかくていい！？ですよね。中には猫ちゃんがホッカホッカ♡♡♡正月はこたつでみかん。いつもの〇〇〇が幸せ。（Ｉ）
● 11 月 30 日、水木しげるさんが亡くなった。数年前から手帳に書いている水木さんの「幸福の七カ条」を今年も書き写す。「しないではいられないことをし続けなさい」「目に見えない世界を信じる」…。（Ｈ）
● 2015 年は色んなことが実を結び、前進するような年でした。2016 年は、あしからおしりになるので忙しくなりそうですが、楽しく過ごしたいです。（ひ）
● 人間の年齢でいうと 100 歳を超える愛猫は、日々研鑽怠りなく、新たにえげつな～い鳴き声を開発。より効率的に人間どもを操っています。為せば成る！ですねえ。（Ｋａ）
● これを書いている、今日は冬至。一年で一番日照時間が短い日だが、冬が終わり、春の始まりの日でもある。一陽来復「悪いことが続いた後で幸運に向かうこと」という意味も。皆様良いお年を（Ｋ）